

六月の家

fuma motobiko

夫馬基彦



六月の家

fuma notohiko

夫馬基彦

福武書店



夫馬基彦（ふま・もとひと）
一九四三年、愛知県一宮市生まれ。
早稲田大学仏文科中退。七七年「宝
塔湧出」で中央公論新人賞受賞。
「緑色の渚」「金色の海」「紅葉の秋の」
が、第97・98・99回の芥川賞候補作と
なる。著書に『夢現』（中央公論社）
『楽平・シンジそして二つの短編』『金
色の海』『紅葉の秋の』（以上福武書
店）『美術館のある町へ』（創隆社）『熱
と瞑想』（烏書房）など。

六月の家

一九八九年三月一〇日 第一刷印刷
一九八九年三月一五日 第一刷発行

定価一五〇〇円

著者 夫馬基彦

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二一三二八

〒103 電話〇三三〇一・二二二八

振替口座（東京）六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

製本 小泉製本

平版印刷 栗田印刷

（落・乱丁本はお取替えいたします）

目次

聖地にて

5

雛まつり

75

六月の家

161

装画
丁 平野真理子
菊地信義

六月の家

聖地にて

向うで女が二人床の上に坐りこんでしきりに装身具をいじっている。一人は三十前後、一人はまだ十六、七だろう。

三十前後の方は太り肉^{ニク}の軀に髪を背まで垂らし、厚い衣服の胸もとを大分ゆったり開いている。衣服は彼ら特有の、上半身は胸もとで合せ、下半身はロングスカートのように踝まで届く長い民族衣裳で、しかも三枚ほど重ね着でもしているのか随分重たげな上、黒ずんでいる。おかげで、もうちよつとでふくらみの部分まで見えそうな露出した肌がいやでも目立つ。肌は健康に赤味をおび、心なしか僅かに湯気が立っているようにも見える。いつもは後ろで縛っている髪を今は洗い髪ふうにしてもいるから、あるいは水浴びでもしてきた後なのかもしれない。顔は丸みをおびた柔いつくりで、軽く開き気味の口もとには艶っぽい笑みを常時浮べている。

耳には大きなトルコ石の耳飾りをさげ、横坐りにした膝の上には赤い珊瑚の首飾りを拡げ、今、手では左の指に指輪をはめたりはずしたりしている。膝の向うにはまだ沢山の装身具が入った皮袋があるようだった。

十六、七の少女の方は髪を一本三つ編みにし、右の頬には白っぽい円形のタムシの痕が一つあって、髯も細く、まだ成熟にはほど遠い。けれども、年上の女およびその装身具にはよほど興味と羨望の念があるらしく、素足にサンダルばきの、土間から駆けつけたままといった姿勢で、下半身は土間の方へ向け斜めにしたまま、左手を床についてくい入るように年上の女の手もとを見つめている。ひよっとしたら相手が何気なく指輪の一つくらいはくれないか、いや、それは無理にしろ、自分も何とか早くこれくらい装身具は所持するようになりたい、そうしてそれを身につけ人前でふくらんだ胸を張って艶然と微笑んでみたい、そんな気配が、ぼつぼつふくらみかけている胸の固さや時々右手の指の腹で装身具をそつと撫でてみる手つきなどににじみ出ていた。服装は薄手ではあるが彼女も同じ胸合せの長い服だし、顔つきは二人とも日本人そっくりだから、さしずめ図柄からいってどこぞの古びた浮世絵を見ているような印象さえあった。

「やっぱり女ですねえ」

少し含み笑いするような口調で右脇から坊主頭のキタザワが言葉を洩らした。

「全く、ね。何だか懐しいような光景だ」

男がそう答え、まだ女たちを眺めたまましていると、キタザワが続けた。

「それにしてもどうしてあんな高原の国から珊瑚が出るんでしょうねえ。昔、海だったからというけど、今では平均標高四千メートル級ですよ。その間にどれくらい時間があつたか知らないけど、不思議なことだ」

男もそれに肯いているところへ、今度は左側から「ハイ」といつてセンが、先ほどれい紙の上で細かくほぐしては大麻ガンジヤと混ぜていた大麻樹脂ツシ詰めシの煙管を回してきた。江戸時代の人物のように管の中程を下から受けるように持つて軽く吸うと、煙は喉の奥で少しもやってから、スツと肺へ入っていった。いがらっぽさも、濃厚すぎて異和感を起す感じもなく、すぐ心地よい眩惑感とも陶醉感ともいったものが喉の奥から身を包んでいく印象で、味はいい。煙管の先を見ると、そこから微かに立ち昇っている煙の色も白にやや紫がかって頃合だった。匂いもいい。「どうですか」

上手な日本語だが日本人とはややアクセントの違う語調で、センが横から目を覗くように聞いってくるのへ、男は、

「う。悪くな」

と答え、もう一口ゆっくり吸ったあと、煙管をキタザワに回した。センはまるで煙の味具合、効き具合はすべて自分のせいであるかの如く、嬉しげに微笑んだ。

男はテーブル上の、もう冷めてしまった紅茶の甘い滴を一口啜った。土間をはさんだ向うには、先刻の女たち二人の他に、その少し左、奥の炊事場に通じる通路脇に、この店のいわばボーイという接客係のタシが丸椅子に俯いて坐り、しきりに左掌にボールペンで字を書いては右掌でごしごしとこすり消していた。ここからはよく見えないが、書いているのは多分英語の簡単な単語だろう。先刻ガニ股の脚を大きく開きながら目を見開いて寄ってきて「これ、^{テン}ten」と、嬉々として真つ黒な掌を突き出してみせたからだ。尤も、この時言った「これは最初キタザワに向つては高原の国の言葉であり、ついで男に向つて言い直した時は「ジス」と英語だったが。持っているボールペンは男がやった日本製だ。そのペンと背を丸め夢中になつて戯れているタシは、何度見ても年齢不詳である。いつも目を瞠つては踊るように立ち歩く姿を見ているとせいぜい二十歳そこそこの若さのようにも見え、しかし時に茫と突っ立っている横顔を見ると二十六、七ぐらいには見え、当人に聞くと「^{ツエンテイ・フオー}二十四」とか「^{ツエンテイ・ツ}二十二」とかそのつど違つた答が返ってくる。汚れたセーターにズボン姿、足は運動靴ばきで黒髪ボサボサ

といった様子はまるで一昔前の日本の田舎青年そっくりだが、但しズボンの丁度今も左掌をこすりつけている汚れのひどさと、紐と地の部分の区別も定かならぬ靴の黒ずみ具合だけは、最低三十年は時間の溯った寒村の少年を想わせた。

そのタシを除けば、あとは一番左端の帳場で、小豆色の僧衣をまとった大きな入道頭の帳場係がテントの隙間からさしこむ光のもと、脇に赤茶色の錢箱を置いたまま、胡座姿でうつらうつらと舟を漕いでいるだけだった。この入道頭は、同じ坊主頭でもキタザワとは違って、何でも本物の僧だそうだが、それがなぜこういう店の帳場係をしているのかはいっかな分らない。あるいはこの店は生臭坊主の副業経営なのか、それとも単なる雇われ経理係でもあるのだろうか。

いずれにしろ、その入道とタシと女たちは、二十年以上前、雪山の彼方の高原の国からこの国へ流れこんできたいわば山の民たちであり、キタザワや男と顔つきも表情も殆ど同じモンゴル人種だった。この国の人間であるセンだけが色も褐色で鼻も尖った異人種だったが、しかし代りに彼は小ざっぱりした日本製のブルジョーズの上下に同じく日本製の真っ白な新型スニーカーで身を固め、もっぱら日本語でだけ言葉を発していたので、男の気分としては外国人を脇に置いている実感はなかった。

そうして、その十五、六坪ほどの長方形の空間は、テント地によって陽ざしを遮った翳の世
界だった。といつても、明け放しの入口からは四角い光が心もち斜めに、そして天井といわず
四囲といわずそここの破れ目やほころびからは白い光が焦点のぼやけた星や線となって射し
こんではいるが、それはまた薄茶色じみた翳の部分の柔さに頃合のアクセントを与え、向うの
女たちにせよ入道帳場係にせよ、ところどころ姿態をまだらに見せて、南国二月の午後の中の
暖かさを目にも肌にも感じさせていた。実際、それは落着いた、もの優しく、懐しい気配その
ものであり、男にはここが母国から直線距離にしても一万キロ以上も離れた場所とはとても思
えぬほどだった。

「ハラさん、このハッシはマナリ産だから透明感があつていいでしょう。湿った感じもなく、
といつてアフガン産のように乾ききつた砂漠の匂いといった訳でもなく、澄んだ山岳地帯の青
空と雪山の味がする」

キタザワがそう言い出したのは、センの煙管が二度目に回った時だった。見るとキタザワは
テーブルに両肘をついたまま、もう消えかかった煙管の雁首の中の火をそれこそ霞でも見るよ
うな眼差しで見つめ、黄色い腰巻でくるんだ両脚をテーブルの下でだらりと前へ投げ出して
いた。足先は素足に擦り切れた革サンダルばきである。昨日初対面の際、話してくれたところ

は、そのサンダルは彼の手製だそうだ。腰巻も糸で繕ったあとが何ヶ所がある。

「マナリという所には雪山があるんですか」

「ええ、あるというか見えるらしいですね。相当峻険な、こんな谷あいの所らしいけど」

キタザワはそう言つて両手で大きく、極端に深いV字を描いてみせ、更に続けた。

「ぼくもあっちへはまだ行ったことはないけど、行つてた連中の話だと凄いとこらしいですよ。少し脇へ入ると、もう傾斜が六十度くらいの谷がずっと続き、そこによくも建つていてと思えるような家が点在し、周りは一面の大麻畑らしいですね。何でも温泉の出る村も一つ二つあるらしくて、ヨーロッパなどからの^ツはぐれ者^イはそこに集つては毎日ハッシを吸っているんですよ。高地で空気が薄いせいもあつて、もの凄く効きがいいと言ふな。一発で昇天らしい、ハッハ」

キタザワは肝炎の予後でまだ薄黄色いままの目をやや下げ気味にし、削げてはいるが妙にツルリとした頬を動かして笑つた。横から見ると鼻下に僅かに無精髭が生えているが、元来体毛が薄い体質なのか、あとは揉みあげ下に心もち黒みがある程度で、おかげでこの男もどこか年齢不詳だった。話の具合からすると多分二十七、八と思えるのだけれど、外見からは時に二十二、三くらいにも見え、何より本人自身が「こういう生き方をしていると歳は関係なくなりま

すよ。まあ三十前ですがね」などと軽く笑ってみせたりするから一層分らない。

「それにしてもちよつと吸つただけでマナリ産と分るんですか」

男が感心して尋ねると、キタザワはニヤリと笑って答えた。

「そりゃ分ります。ま、こういうものは酒と同じでしてね、産地というか銘柄によってそれぞれ味が違います。順序からいうとまず、北の方の産か南のものか、高地のものか低地のものか、海べのものか砂漠地方のものか、で区別が付きまます。簡単に言えば北のものだどこか明晰でスキツとした味がするし、高地のものだとそれに更に透明感が加わり、乾燥度が高い地方だと軽く温めほぐしていく時の硬度自体が違う上、効き具合も荒涼たる曠野に立ったような気分になります。南の海べのものだとその反対になる訳ですが、例えば味と効き具合からいってマナリと双壁のココ産だと、海べの椰子ばかりある熱い場所ですから、味も厚ぼつたくてトロツとした感じになり、匂いも少し甘い氣がします。火をつけるとマナリ産などと違って煙も少し赤茶色っぽくなったりし、吸うとき喉にちよつと抵抗感を与えるけど、効きはいい。喉の奥にツーンと抜ける感じがしたと思うと、目の前がトロリと靄った印象になり、その時はもう足など大地の上を踏んでいる氣はしなくなっています。そうして、周りの空氣がそのまま胎内の温かみみたいに思えてきて、そうだな、官能的というか駘蕩というか、何だか仏の懷に抱かれてい